

清華簡『赤鳩之集湯之屋』における桀王の疾病は吉か凶か… 清華簡伊尹関連文献を踏まえて

六車 楓

序・問題の所在

清華大学蔵戦国竹簡（以下、清華簡）は炭素十四年代測定から考えて、戦国時代中期頃に筆写された竹簡資料群である。清華簡には数多くの文献が記されているが、そのうち二〇一二年に公開された『赤鳩之集湯之屋』（以下、『赤鳩』）は、殷の湯王が赤鳩を捕獲し、伊尹がそれを煮て羹とすることを発端に、巫術思想を基盤にして物語が展開される。先行研究では、本篇が伊尹伝承と関わる文献と指摘されている¹⁾。

論者（六車のこと。以下同じ）は本稿に先立ち、次に掲げる『赤鳩』の桀王の疾病描写について、その疾病観を考察した。

小臣曰く、「帝二黄蛇と二白兔とに命じ後の寢室の棟に居らせ、其の下に後の疾を予えしめ、是れ后をして禁禁恂恂として人を知らざらしむ。帝后土に命じて二陵屯を為り、共に後の牀下に居らしめ、其の上の後の身を刺す、是れ后をして昏乱甘心せしむ。后如し屋を撤き、黄蛇と白兔とを殺し、地を發きて陵を斬れば、后の疾其れ瘳ゆ」。夏后乃ち小臣の言に従いて、屋を撤き、二黄蛇と一白兔とを殺して、乃ち地を發く。二陵薦有れば、乃ち之を斬る。其の一白兔を得ず、是れ始めて璧を為り、諸屋を覆い、以て白兔を御ぐ。

小臣曰、「帝命二黄蛇與二白兔居后之寢室之棟、其下豫后疾、是使后禁禁恂恂而不知人。帝命后土爲二陵屯、共居后之牀下、其上刺后之身、是使后昏亂甘心。后如撤屋、殺黃蛇與白兔、發地斬陵、后之疾其瘳」。夏后乃從小臣之言、撤屋、殺二黃蛇與一白兔、乃發地。有二陵薦、乃斬之。其一白兔不得、是始爲璧、覆諸屋、以御白兔。（第十一～十五簡）²⁾

ここでは黄蛇と白兔、丘陵が桀王に疾病をもたらす病因と見なされる。これらは全て鬼である。鬼が人間を發病させるという思想は、古くは甲骨文にも見え、氣の思想で病氣や身体を解釈する『黄帝内経』が漢代に成立する前に特に流布していた疾病観である。論者は『赤鳩』の背景にもこの疾病観が存在することを明らかにした³⁾。

ただ、先述の考察は疾病の原因が何であったか、すなわち病因論にかかわる議論に終始してしまい、『赤鳩』における桀王の疾病が持つ意味やイメージ、具体的に言えば、桀王の疾病が吉であるか凶であるかについては、考察を保留した。先の拙稿でも述べたとおり、疾病は患者（本篇では桀王）からすると凶事である。一方で、桀王は歴史的に悪徳の人物とされるため、虐げられた民からすれば、疾病は桀王の悪政に歯止めをかける吉事である。しかし、『赤鳩』の記述だけからは桀王が悪徳の人物として描かれているのか、桀王の疾病は民にとつての吉祥であったのかは分からない⁴⁾。

そこで、本稿では積み残しとなっていたこの問題を解決したい。そのため、『赤鳩』と同じく清華簡の伊尹関連文献である『湯處於湯丘』『湯在啻門』『尹至』『尹誥』における疾病記述や桀王と伊尹の評価をまとめ、清華簡が筆写された戦国中期における桀王と伊尹、そして疾病そのものの捉えられ方を明らかにする。後で述べるように、『赤鳩』は『尹誥』『尹至』と同冊に筆写されていた可能性が高いため、文献の収録状況の観点からも、『赤鳩』における伊尹と桀王の評価や疾病記述の特徴を検討していく。桀王の疾病が誰にとってどのようなものであったのかを明らかにすることで、『赤鳩』の背景にある疾病観をより鮮明にできるであろう。

一 『湯處於湯丘』

(一) 書誌情報

まずは『湯處於湯丘』（以下、『湯丘』）の書誌情報を整理者の説に従ってまとめる。本篇は全十九簡で、篇題や竹簡番号はないが、整理者が内容から推測して竹簡の順序と篇題を確定した。本篇は次章で紹介する清華簡『湯在啻門』と竹簡の形制と字迹が同じであり、内容も関係していることから、同一人物によって筆写され、ともに戦国時代の作品と考えられる。

『湯丘』と『湯在啻門』は両方とも伊尹故事にまつわる文献で、これらの内容は一部『墨子』貴義、『呂氏春秋』本味、『史記』殷本紀などの文献に記載されており、『漢書』藝文志に載っている『伊尹』五十一篇の佚篇である可能性がある。『湯丘』の一部の内容は、『春秋左氏伝』哀公元年の記述と主旨が同じで、句形も近く、民を気にかける徳政を好む春秋戦国時代の政治気風を反映している⁵⁾。

なお、『清華大学蔵戦国竹簡校釈（参）《尹至》諸篇』によれば、本篇は竹簡の形成と劃痕の位置などから、次章で取り上げる『湯在啻門』に続けて同冊の竹簡に筆写されていた可能性が高い⁶⁾。

(二) 桀王の疾病に関する記述

本篇には桀王の疾病に言及する箇所がある。

湯又た小臣に問う、「吾夏を戡^{かん}するに如^い台^{かん}」。小臣答うるに、「后固より天威を恭しくし、祀を敬い、淑く我が民を慈しみ、若し自ら朕の身をして桀の疾を已ましむれば、后将に君の夏を有^たんとするや」。

湯又問於小臣、「吾戡夏如台」。小臣答、「后固恭天威、敬祀、淑慈我民、若自使朕身已桀之疾、后将君有夏哉」⁸⁾。（第十三～十四簡）

湯王が「小臣」すなわち伊尹に対して、夏を倒すにはどうすればよいかと聞くと、伊尹は天や祭祀を敬い、民を慈しむことを必須事項として挙げつつ、自身を夏に派遣し、桀王の病を治療させれば、夏を統治できると答える。

この記述において、桀王の疾病が吉凶・善悪どのイメージで捉えられているかは判然としないが、派遣された伊尹が桀王の疾病を治すことが統治に繋がると説くところから推測するに、伊尹は桀王の病苦を取り除き、桀王にうまく取り入ろうとする計画であろう。そうすると、疾病は桀王にとって嫌なもの、苦しいものと思われる。

(三) 伊尹と桀王の評価

前節で取り上げた文章の前段では、次のように桀王の政治について言及する。

湯又た小臣に問いて曰く、「夏の徳を有つこと何若や」。小臣答うるに、「夏の徳を有つや、貨を使いて以て惑わせ、春秋則を改め、民人忒うを誣り、刑に赦す攸無く、民人咸な替れて偶離し、夏王其の凶を得ず」。

湯又問於小臣、「有夏之徳何若哉」。小臣答、「有夏之徳、使貨以惑、春秋改則、民人誣忒、刑無攸赦、民人咸替偶離、夏王不得其圖」。(第十一～十三簡)

ここでは夏王、すなわち桀王の悪政ぶりを伊尹が説明する。桀王は明らかに悪徳の人物として認識されている。伊尹の評価については、文章から明確には読み取れないが、本篇全体が湯王と伊尹との問答体であることを踏まえれば、湯王が伊尹を頼りにしている様子がうかがえ、伊尹は良き臣下として描かれていると言えよう。

二 『湯在啻門』

(一) 書誌情報

『湯在啻門』は湯王が伊尹(文中では「小臣」)に古の帝王の良言について問い、伊尹が成人、成邦、成地、成天の道について答えるものである。竹簡枚数は全二十一簡である。これらの記述は、当時の天人観を表していると言える。特に「成人」部分では、気思想をもって人間の生死や疾病を説明する。

(二) 疾病に関する記述

本篇における疾病に関する記述は以下のとおりである。

湯又た小臣に問うて曰く、「人何をか得て以て生まるる。何をか

多くして以て長ずる。孰をか少なくて老ゆる。胡ぞ猶じく是れ人にして、一いは悪一いは好なるか」。

湯又問於小臣曰、「人何得以生。何多以長。孰少而老。胡猶是人、而一悪一好」。(第五～六簡)

湯王は伊尹に対し、「何が人を生まれさせるのか。何を増加させて成長するのか。何を減少させて老いるのか。どうして同じ人間でありながら、病気になる者もいれば健康な者もいるのか」と問う。ここでは、「悪」すなわち病気になる者と、「好」すなわち健康な者とを対比し、明らかに疾病が悪いことと捉えられている。この質問に対し、伊尹は次のように答える。

氣蹙みて乃ち老い、氣舒びて乃ち廝ち、氣逆乱して以て方え、是れ其れ疾殃を為す。

氣蹙乃老、氣舒乃廝、氣逆乱以方、是其爲疾殃。(第九～十簡)

本篇は気思想によって人間の生死、健康、疾病を解釈しており、鬼を病因と見なす『赤鳩』とは病因論が異なる。具体的には、気が縮まって減ると老い、気が散じると身体は衰弱し、気が乱れると身体が損なわれ、こうなると疾病の災いが生じるという。この「疾殃」という表現から明らかなおと、疾病は災いと考えられており、人間にとって良くないことと評価されている。

(三) 伊尹の評価

本篇は全体を通して伊尹と湯王の問答体であり、湯王が人・邦・天・地をいかに成就させるかという治国の根本に関わることを伊尹に尋ねている。この内容を見ると、湯王は伊尹のことを信頼しているようである。

また、第二十一簡には、「湯曰く、「天尹、唯れ古の先帝の良言、則

ち何ぞ以て之を改めん」(湯曰、「天尹、唯古之先帝之良言、則何以改之」)とあり、伊尹を「天尹」と呼ぶところに伊尹に対する湯王の評価がはっきりと表れている。整理者によれば、この語は天から賜った尹、すなわち伊尹のことを指し、殷の人々には良臣を天に賜るという觀念があり、清華簡『説命上』の「惟れ殷王説を天より賜う(惟殷王賜説于天)」という記述に類する¹³⁾。この語から、湯王が伊尹を高く評価していたことは明らかである。

右に引用した部分では、伊尹が「小臣」と表現され、彼自身の評価を表すような言葉ではない。しかし、文脈から推測するに、読者が本篇を読んだ際には、伊尹のことを良臣と見なしたであろう。本篇が支配者の視点で一貫して書かれている点を踏まえると、読者は為政者をはじめとする政治に関わる人間が想定され、そのような人々がこの文献を読んで執政を学んでいた可能性が考えられる。伊尹の発言はいかつ湯王が伊尹の話に納得しているため、これを読んだ読者は、伊尹が優れた人物であったとの印象を受けるであろう。

三 『尹至』

(一) 書誌情報

整理者によると、『尹至』は全五簡である。篇題がなかったため、整理者が冒頭の句から仮題として「尹至」と名付けた。竹簡の裏には編号が付されている。内容は伊尹が夏から殷に至り、湯王に桀王の悪政を説明するものである。本篇の一部の語句は『呂氏春秋』慎大と似ており、『呂氏春秋』慎大の作者が『尹至』あるいは類似文献を見たことを示す。本篇の続きには『尹誥』が収録されており、竹簡の形制

や長さは全く同じで、字体も同一人物によるものであるため、同時期に書写されたと考えられる¹⁵⁾。

なお、肖芸曉氏は、『赤鳩』『尹至』『尹誥』の竹簡背面の劃線がぴったりと合うことから、『赤鳩』↓『尹至』↓『尹誥』の順に配列できると指摘する。さらに、同一人物が同冊に筆写したとも述べる。内容から見ても、『赤鳩』で伊尹は湯王の怒りを恐れて夏に逃げ、『尹至』で殷に戻り、『尹誥』で夏が滅亡して誥命を頒布するという流れであり、時間の順序に沿っている¹⁶⁾。この肖芸曉氏の説には賛同できる。この文献の配列は各文献における伊尹と桀王の評価を理解する上で大きな意味を持つであろう。

(二) 伊尹と桀王の評価

本篇には疾病に関する記述がないため、伊尹と桀王の評価に論点を絞る。字数が少ないため、以下に全文を掲載する。

惟れ尹夏より毫に徂き、遠きて湯に至る。湯曰く、「格たれ、汝は其れ吉志有らん」。尹曰く、「后、我来たりて、越に今恂恂たり。余其の有夏衆は□吉好、其の有后は厥の志其れ喪い、二玉を寵し、其の有衆を虞えざるを微う。民率に曰く、「余と汝と皆亡びん」。惟れ茲の虐徳・暴動・亡腆の夏の祥有るは、西に在り東に在り、見れば天に章らかなり。民率に曰く、「惟れ我禍を速く」。咸曰く、「胡ぞ東祥章らかならずや。今其れ如台」。湯曰く、「汝我に夏の隠れて率いることは是くの若きを告げん」。尹曰く、「是くの若し」。湯尹と盟質し、茲において乃ち大援を柔んず。湯往きて附かざるを征す。摯の度摯の徳僭わず。西よりして西邑を翦して、夏に戡つ。夏民を播ち水に入りて日に戦し、帝曰く、「一も遺す勿れ」。

惟尹自夏徂亳、遂至在湯。湯曰、「格、汝其有吉志」。尹曰、「后、我來、越今恂恂¹⁷。余微其有夏衆¹⁸□吉好、其有后厥志其喪、寵二玉、弗虞其有衆。民率曰、「余及汝皆亡」¹⁹。惟茲虐德・暴動・亡腆²⁰夏有祥、在西在東、見章于天²¹。其有民率曰、「惟我速禍」。咸曰、「胡今東祥不章。今其如台」。湯曰、「汝告我夏隱率若是」。尹曰、「若是」。湯盟質及尹、茲乃柔大援。湯往征弗附。摯度摯德不僭。自西翦西邑、堪其有夏。夏播民入于水曰戰、帝曰、「一勿遺」。

(第一～五簡)

本篇は、夏の悪政に民が不満を漏らす状況を描く。また、夏の政治が「虐徳(悪虐な徳)」「暴動(人道に外れた統治)」「亡腆(不善)」と表現されていることから明らかかとおり、ここでもやはり夏の桀王の評価は悪い。一方、伊尹はスパイとして夏に潜入し、その状況を湯王に伝えた。これにより、湯王は夏を討つに至った。「摯の度摯の徳僭わず」、つまり伊尹が作った規則や伊尹自身の徳は道理に背かないものであったという記述には、伊尹を高く評価する意図が読み取れる。

四 『尹誥』

(一) 書誌情報

本篇は全四簡で、篇題はなく、『礼記』や郭店楚簡・上博楚簡『緇衣』から仮題をつけた。『尹誥』は『尚書』中の一簡で「咸有一徳」と呼ばれるものの可能性があるが、簡文は東晋の梅賾が献上した孔文本『尚書』咸有一徳とは全く異なる³⁰。

(二) 伊尹と桀王の評価

本篇にも『尹至』と同じく疾病に関する記述がないため、伊尹と桀

王の評価に論点を絞る。本篇も字数が少ないため、全文を掲載する。惟れ尹、既に湯及咸な徳を一にする有り。尹、天の西邑夏を敗るを念いて曰く、「夏は自ら其の有民を絶ち、亦た惟れ衆に蹶る。民に非ざれば、与に邑を守るもの亡し。厥の辟、怨みを民に作し、民は之に復いるに離心を用てすれば、我は夏を翦滅せり。今、后曷ぞ監みざらんや」と。摯湯に告げて曰く、「我克く我が友と協えり。今、惟れ民に邦を遠ざかりて帰らんとするの志あり」と。湯曰く、「嗚呼、吾何をか民に作して、我が衆の朕の言に違ふこと勿からしめんや」と。摯曰く、「后、其れ之に賚え。其れ夏の金玉・田邑有り。之に吉言を舎せ」と。乃ち衆を亳中の邑に致む。

惟尹既及湯咸有一徳。尹念天之敗西邑夏曰、「夏自絶其有民、亦惟蹶衆、非民亡與守邑。厥辟作怨于民、民復之用離心、我翦滅夏。今后曷不監。摯告湯曰、「我克協我友。今惟民遠邦歸志」。湯曰、「嗚呼、吾何作于民、俾我衆勿違朕言」。摯曰、「后其賚之。其有夏之金玉・田邑、舎之吉言」。乃致衆于亳中邑。(第一～四簡)³¹

ここで伊尹は湯王に頼りにされる。福田哲之氏は、本篇から読み取れる伊尹の姿について、伊尹が「我は夏を翦滅せり」と夏の滅亡が伊尹の手によるように語り、湯王に対する進言にも、自らが湯王を主導し、殷の統治を保とうとする強い使命感が貫かれていると述べる³²。さらに、冒頭の「惟れ尹、既に湯及咸な徳を一にする有り」については、伊尹を有徳者と見なす『孟子』と同じく、伊尹を湯王と同等の位置に押し上げようとする思想がうかがえると指摘する³³。

福田氏の説を踏まえれば、本篇における伊尹の評価はきわめて高いと言える。反対に、有徳者である伊尹に滅ぼされた夏は、民に怨まれ

ていた。ここには桀王が悪徳の人物であるという伝統的な歴史認識がうかがえる。

第一章から第四章までで検討した疾病そのものおよび桀王・伊尹への評価をまとめると、以下のとおりである。

・『湯丘』……疾病は桀王にとって嫌なもの。桀王は悪、伊尹は賢人。

・『湯在畜門』……疾病は災いであり、人間にとって良くないもの。伊尹は賢人。

・『尹至』……桀王は悪、伊尹は賢人。

・『尹誥』……桀王は悪、伊尹は賢人。

次章では、この評価を基に、『赤鳩』における桀王の疾病が吉であつたか凶であつたかについて検討する。

五 『赤鳩』における桀王の疾病は吉か凶か

『赤鳩』における桀王の疾病の評価を考察するには、まずここまで検討した四篇と『赤鳩』の収録状況から、各文献の関係性を明らかにしておく必要がある。これら五篇は、右で述べたとおり、『湯在畜門』『湯丘』と『赤鳩』『尹至』『尹誥』とがそれぞれ同冊であつた可能性が高い。そこで、仮に『湯在畜門』『湯丘』をA組、『赤鳩』『尹至』『尹誥』をB組として、文献の収録順に並べた上で、一言で内容を表し、先に記した疾病と桀王、伊尹の評価も合わせると、次のとおりになる。(凡例…篇名……内容／評価)

【A組】

『湯在畜門』……統治論の問答。／疾病は災いであり、人間に

とつて良くないもの。伊尹は賢人。

← 『湯丘』……夏を倒す方法について問答。伊尹は湯王に自身を夏に送り込み、桀王を治療させるよう提言。／疾病は桀王にとって嫌なもの。桀王は悪、伊尹は賢人。

【B組】

← 『赤鳩』……伊尹が湯王に殷を追い出される。夏の地で伊尹が桀王に治療法を伝える。／？

← 『尹至』……夏で伊尹が得た情報を殷に持ち帰って湯王に報告。

← 夏と殷とが開戦。／桀王は悪、伊尹は賢人。

← 『尹誥』……夏滅亡。殷の統治。／桀王は悪、伊尹は賢人。

こうして見ると、肖芸曉氏が指摘したとおり、B組の構成からは明らかに時間の経過が感じ取れる。A組は二篇しかないため、単純に伊尹関連の文献としてまとめられた可能性もあり、『湯在畜門』から『湯丘』の間に時の流れを見出してよいかは慎重に考えるべきである。しかし、まず『湯在畜門』で伊尹が統治論を湯王に説き、それを理解した湯王が夏の討伐を決意したと解釈すれば、両篇の間に一定程度の時間の流れがあると言ふこともできる。

各篇の収録順と内容の関係性を踏まえ、『赤鳩』における桀王の疾病記述に的を絞れば、『赤鳩』で伊尹が桀王に治療法を伝えているのは、「桀王の疾病を治させてほしい」という『湯丘』の伊尹の提案が実現した結果と見なせるであろう。つまり、『赤鳩』の内容は伊尹の夏におけるスパイ行為の一部と言える。伊尹のスパイ行為については、『孟子』告子下に「五たび湯に就き、五たび桀に就くは、伊尹な

り（五就湯、五就桀者、伊尹也）」、『戦国策』燕策二に「伊尹再び湯より逃げて桀に之き、再び桀より逃げて湯に之く（伊尹再逃湯而之桀、再逃桀而之湯）」などというように、伝世文献に散見される。伊尹が夏で桀王の信任を得た理由は、伝世文献に詳しく書かれていない。しかし、『赤鳩』と『湯丘』の記述を加味してみると、伊尹の治療が信頼される理由であったことは想像に難くない。劉国忠氏がすでに指摘しているように、『呂氏春秋』慎大の「伊尹をして往きて曠夏を視しめんと欲するも、其の信ぜられざるを恐れ、湯由りて親自ら伊尹を射る（欲令伊尹往視曠夏、恐其不信、湯由親自射伊尹）」という記述は、『赤鳩』冒頭で伊尹が湯王の羹を飲み、湯王の怒りを買ったことと類似する。こうした伊尹の行為には、桀王に伊尹と湯王とが不和であると誤解させる狙いがあった。この後、『呂氏春秋』慎大でも『赤鳩』でも伊尹は湯王から逃れた後、夏に侵入している。

また、『国語』晋語一には「昔夏桀有施を伐ち、有施人妹喜を以て女らせ、妹喜に寵有り、是に於いてか伊尹と比して夏を亡ぼす（昔夏桀伐有施、有施人以妹喜女焉、妹喜有寵、於是乎與伊尹比而亡夏）」と、妹喜と伊尹が仲の良かったことが記されている。その理由も伝世文献には見えないが、『赤鳩』や『湯丘』の記述を踏まえれば、伊尹が桀王の命を救ったことで妹喜に気に入られ、情報を多く得られた可能性³⁶や、伊尹が桀の信任を得て妹喜の師となり、仲良くなった³⁷ことが推測できる。

このように、清華簡の五篇は、伝世文献の記述や伝統的な歴史認識と重なる点が多く、なおかつ伝世文献を補足し得るものと位置づけられる。このことは、『赤鳩』における伊尹と桀王の評価を推測する上で鍵を握る。

五篇の内容は一篇として緊密に繋がっておらず、断片的であるた

め、伊尹（あるいは湯王・桀王）に関係する文献がそれぞれ別の原本から寄せ書きされたと見るのがよいであろう。しかし、その内容の緩やかな繋がりを参考にすれば、『赤鳩』における疾病および伊尹・桀王の評価は自ずと明らかになる。

まず疾病は、『湯在齋門』『湯丘』に基づくと、『赤鳩』でも悪いものと考えられる。疾病が吉であるか凶であるかは、本稿序文で述べたとおり、視点によって変わるものである。すなわち、患者自身である桀王からすれば凶、桀王に苦しめられている夏の民からすれば、桀王が寝込んでいる間は（あるいは亡くなれば）悪政から解放されるので吉である。

ここで、どちらの視点で理解すべきか決め手になるのは、各篇が誰の視点で書かれているのかということである。『赤鳩』を含め、五篇とも全て殷の為政者の視点で書かれており、民自身の台詞は出てこない。民の状況も伊尹の口から語られるという特徴がある。これを踏まえれば、『赤鳩』における桀王の疾病も民の心情を介して理解すべきではない。よって、桀王の疾病は桀王自身の立場から解釈して凶事と見なせるであろう。桀王が伊尹から治療法を聞いてすぐさま実行している描写からも、桀王が疾病を嫌なものと捉え、早く解放されたいと思っていたことが想像できる。

また、桀王と伊尹の評価は、『赤鳩』以外の四篇では一貫して桀王が悪、伊尹が賢人とされ、『赤鳩』も伊尹のスパイ行為の一場面を記していると考えれば、桀王が悪で伊尹が賢人という伝統的な評価を与えられていると言つてよいであろう。

しかし、桀王が発病した原因が悪徳にあるかどうかは判然としな

うことだけである。

最後に、『湯在畜門』と『赤鳩』で展開される病因論について付言したい。

第二章第二節において、『湯在畜門』は人間の生死、健康、疾病を気の思想で説明しており、鬼を病因と見なす『赤鳩』とは病因論が異なると述べた。同時期に筆写された文献の病因論が異なるのは不思議なことではない。全て伊尹関連文献といえども、各篇は本来別々に成立した可能性が高いため、各篇によって病因論が異なるのは自然なことである。

横山慎悟氏は、「伊尹の料理を食べた湯王の妻と伊尹自身がはるか遠くまで見通せるようになる」という『赤鳩』の記述が、春秋戦国時代の名医である扁鵲が長桑君からもらった薬を飲んで病人を透視できるようにになった逸話（『史記』扁鵲伝）に類似すると指摘する。また、伊尹も扁鵲も後世、それぞれ湯液と経脈診断などの医術部門の始祖とされ、それらの普及に貢献したことに鑑みれば、両説話には一定の意味を見出せるとする³⁸。そして、医療と食事とは古代中国において結びついており、『赤鳩』のような伊尹料理人説話は、当時医・食にまつわる思想の普及を促した一例として理解できると述べる³⁹。この指摘と『赤鳩』の病因論とをあわせて考えると、『赤鳩』には、『湯在畜門』で気の理論を展開し、後に気の理論と結びつく湯液の始祖とされた伊尹が、桀王の病因を鬼と断定するという一見矛盾した構造が見出せる。

しかし、これは不自然なことではなく、むしろ身体や疾病を気の思想と鬼の思想の両方で理解していた当時の疾病観の実情を留めていると言える。伊尹が生きた殷代には、鬼が人間を崇めて発病させると考え、亀卜により治療方針を占い、祈祷によって治療した。この病因論

は後世にも受け継がれ、本稿で考察対象とした伊尹関連文献五篇と同じ資料群に属す清華簡『五紀』には、「凡そ民に疾有るに、腰より以上、是れを興疾と謂い、天鬼の祟りなり。腰より以下、是れを辟隔と謂い、地鬼の祟りなり（凡民有疾、自腰以上、是謂興疾、天鬼祟。自腰以下、是謂辟隔、地鬼祟）」（第九十二～九十三簡）というように、基本的に鬼を病因と見なしながらも、「凡そ民に疾有るに、百体百節に、疾莫く痛み莫きも、暑熱僂僂たりて、会気狂と為り、衍氣瘍と為る（凡民有疾、百體百節、莫疾莫痛、暑熱僂僂、會氣爲狂、衍氣爲瘍）」（第九十四簡）と、熱気が病を引き起こすことも記されている。この気は、後世の中国医学のような体内を巡る気ではなく、より純粹な外気の意味であるが、疾病を鬼と気両方の思想で解釈している例と言える⁴⁰。

また、『史記』扁鵲伝で扁鵲は、「巫を信じ医を信ぜず（信巫不信醫）」、つまり巫術による治療を信じて、医者による治療を信じない者は病が治らないと述べる。気の理論を用いて薬や針で治療した扁鵲は、鬼を祓って治療する巫祝を批判したのである。しかし、これも裏を返せば、扁鵲の活躍した春秋戦国時代においても、病因論の中に鬼と気の思想が共存していたことを物語る資料と言える⁴¹。清華簡の筆写年代は戦国中期頃なので、『湯在畜門』と『赤鳩』の存在は、右で述べたような気の思想と鬼の思想とが併存した当時の状況を反映していると言つてよいであろう。

結

以上、清華簡『湯處於湯丘』『湯在畜門』『尹誥』『尹至』における疾病の捉えられ方や桀王と伊尹の評価を基に、『赤鳩』での桀王の疾病が吉であったか凶であったかを検討した。ここまでの考察を踏ま

え、第五章に掲げたA組とB組の各篇の内容と疾病と桀王、伊尹の評価に、『赤鳩』の疾病と桀王、伊尹の評価を付け加えると、次のようになる。

【A組】

『湯在齊門』……統治論の問答。／疾病は災いであり、人間にとって良くないもの。伊尹は賢人。

←

『湯丘』……夏を倒す方法について問答。伊尹は湯王に自身を夏に送り込み、桀王を治療させるよう提言。／疾病は桀王にとって嫌なもの。桀王は悪、伊尹は賢人。

【B組】

『赤鳩』……伊尹が湯王に殷を追い出される。夏の地で伊尹が桀王に治療法を伝える。／疾病は桀王にとって嫌なもの。桀王は悪。伊尹は賢人。

←

『尹至』……夏で伊尹が得た情報を殷に持ち帰って湯王に報告。夏と殷とが開戦。／桀王は悪、伊尹は賢人。

←

『尹誥』……夏滅亡。殷の統治。／桀王は悪、伊尹は賢人。

『赤鳩』は民の視点からではなく、殷の為政者の視点から描いている。この構造と、桀王が自分の病を治そうと行動しているところに鑑みれば、『赤鳩』における桀王の疾病は、桀王自身にとつての凶事と言える。『赤鳩』を含む、清華簡の伊尹関連文献五篇は全て抜き書きされ、何らかの意図で各冊に筆写された。疾病のイメージは、本稿序文でも述べたように、同一人物の疾病であっても視点によって変化するものである。文献の収録状況や各篇の関連もそのイメージを確定さ

せるための一助となるのである。

注

- (1) 清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(参)』下冊(中西書局、二〇一二年、一六六頁)。
- (2) 文字の読み替えなどについては、拙稿「桀王の疾病記述に見る清華簡『赤鳩之集湯之屋』の疾病観」(『中國出土資料研究』第二十九号、二〇二五年七月、二十八〜二十九頁)を参照されたい。
- (3) 注(2)前掲論文、二十七〜四十九頁。
- (4) 注(2)前掲論文、三十八〜三十九頁。
- (5) 清華大学出土文献研究与保護中心編、李学勤主編『清華大学蔵戦国竹簡(伍)』下冊(中西書局、二〇一五年、一三四頁)。
- (6) 馬楠校釈、黄德寬・夏含夷主編『清華大学蔵戦国竹簡校釈(参)』《尹至》諸篇(商務印書館、二〇二四年、四十三頁)。
- (7) 注(6)前掲書四十八頁の注釈①に、「如台」を「奈何」と訓じるとあることに基づく読みである。
- (8) 「后固恭天威、敬祀、淑慈我民、若自使朕身已桀之疾、后將君有夏哉」の釈文は、注(6)前掲書四十八頁に従う。『清華大学蔵戦国竹簡(伍)』の整理者は、当該部分を「后固恭天威、敬祀、淑慈我民、若自事朕身也。桀之疾、后將君有夏哉」と釈読するが(注(5)前掲書、一三五頁)、注(6)前掲書所引の陳劍氏の説では「事」字を「使」字に、「也」字を「已」字に直し、文章の区切りも修正している(陳劍「清華簡字義零札兩則」、《戰国文字研究的回顧与展望》国際学術研討会、二〇一五年)。論者は陳劍氏の論考を参照することができなかったため、このように読み替えた実際の根拠は不明であるが、字形から判断して陳劍氏の説には賛同できる。整理者の釈文における「事」字は原文で「**𠄎**」と、「也」字は「**𠄎**」と書かれているが、他の清華簡における「事」字は「**𠄎**」(厚父)、「也」字は「**𠄎**」(命訓)と書かれていて、『湯丘』における当該字とは字形が異なる。一方で、清華簡において「使」字は「**𠄎**」(管仲)、「已」字は「**𠄎**」(晝夜)と記され、『湯丘』における当該字にきわめて近い。また『湯丘』第十二簡にも「**𠄎**」字が使われているが、整理者はこの字を「使」字に隸定している。よって、当該字は「使」字と「已」字で理解すべきであろう。この上で文脈を考えると、陳劍氏のように文章を繋げた方が文意が通る。よって、本稿でも注(6)前掲書所引の陳劍氏の説に従う。

- (9) 原文では「𠄎」。整理者はこの文字を「貨」字に隸定した上で、「過」字に読み替えるが(注(5)前掲書、一三五頁)、王寧「読清華五《湯處於湯丘》散札」(復旦大学出土文献与古文字研究中心HP・学者文庫 <https://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/2501>、二〇一五年四月二十一日発表)に従い「貨」字のままとする。文脈から考えて、「貨」字でよい。
- (10) 原文では「𠄎」。整理者はこの文字を「誨」字に隸定し、「趣」字あるいは「趨」字で解釈する(注(5)前掲書、一三八頁)。しかし、ここでは王寧「読清華五《湯處於湯丘》散札」に従い、「誨」字のまままで解釈する。意味から考えて、原字を別字に読み替える必要はない。
- (11) 注(5)前掲書、一四一頁。
- (12) 釈読の詳細は、拙稿「清華簡『湯在啻門』の身體と生命、疾病…「成人」を中心に」(『學林』第七十八号、二〇二四年六月、一〇三三七頁)を参照されたい。
- (13) 注(5)前掲書、一四八頁。
- (14) 注(12)前掲論文、二十八頁。
- (15) 清華大学出土文献与保護中心編、李学勤主編『清華大学藏戰国竹簡(壹)』下冊(中西書局、二〇一〇年、一二七頁)。
- (16) 肖芸曉「試論清華竹書伊尹三篇的關聯」(武漢大学簡帛研究中心主辦『簡帛』第八輯、上海世紀出版・上海古籍出版社、二〇一三年、四七一〜四七三頁)。
- (17) 原文は「𠄎」であり、整理者は「旬日」と釈読して伊尹が湯王のもとに来るまで十日かかったと解釈する(注(15)前掲書、一二九頁)。一方、ユージャー名「子居」氏はこの原文と同じ字が「旬」字として上博楚簡『容成氏』に見えることから「旬旬」と隸定し、「恂恂」と解釈した(子居「清華簡九篇九簡解析」、ブログ「中国先秦史」https://xiangqinshi.blogspot.com/2017/09/blog-post_55.html、二〇一七年九月二十三日発表。後文の陳民鎮氏は「孔子2000網」清華大学簡帛研究、專欄 [<http://www.confucius2000.com/admin/list.asp?id=4481>、二〇一〇年六月三十日]を参照しているが、論者は閲覧できなかった)。陳民鎮氏は、この説を踏まえて「恂恂」と読んで恐れるの意味で取り、伊尹が夏の国境を超えるときに恐怖を感じたことを指すとした(陳民鎮「清華簡『尹至』集釈」、復旦大学出土文献与古文字研究中心HP・学者文庫 <https://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/1647>、二〇一一年九月十二日発表)。論者は字形と文脈から考えて、陳民鎮氏の説が最も適切と考える。
- (18) 原文は「𠄎」。整理者は「微」字に通じるとした上で、「閔」字に読み替えるが(注(15)前掲書、一二九頁)、何有祖「清華大学藏簡讀札(一)」(武漢大学簡帛研究中心・簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/?chujian/5569.html>、二〇一一年一月八日発表)に基づき、「微」字に読んでうかがう、偵察するの意味で取る。
- (19) 文字が不鮮明なため、判読不可。注(6)前掲書五頁は、李松儒「再論《祭公》与《尹至》等篇的字迹」(『戰国文字研究的回歸与展望』國際學術研討会、二〇一五年)に基づき、「不」字に隸定する。論者は李松儒氏の説を確信できなかったため、今は不明字のままとする。
- (20) 原文は「𠄎」。季旭昇氏に従い、音の通じる「率」に読み替える(季旭昇主編『清華大学藏戰国竹簡(壹)讀本』、芸文印書館、二〇一三年、九頁)。
- (21) 原文は「𠄎」。整理者は「極」字で解釈するが(注(15)前掲書、一二九頁)、当該字は戦国簡において「徳」字で読む場合が多い。
- (22) 原文は「𠄎」。整理者は「瘡」字に読み替えるが(注(15)前掲書、一二九頁)、本稿では賈連翔「浅談竹書形制現象对文字識讀的影響…以清華簡幾処文字補积為例」(『出土文献』二〇二〇年第一期、八十三頁)に従い、「動」字で解釈する。
- (23) 原文は「𠄎」。整理者は「典」字に読むが(注(15)前掲書、一二九頁)、本稿では宋華強「清華簡校讀散札」(武漢大学簡帛研究中心・簡帛網 <http://www.bsm.org.cn/?chujian/5576.html>、二〇一一年一月十日発表)に従い、「腆」字に読み替える。
- (24) この文章の区切り方は、薛培武「清華簡《尹至》」惟蔽虐德暴亡典夏「句新詮」(『簡帛研究』二〇二三春夏卷、広西師範大学出版社、二〇二三年六月、二九九〜三十一頁)による。なお、薛培武氏は、原文の「𠄎」(「𠄎」)を「災」に読み替える整理者の説は採らず、鄒可晶「《尹至》」惟蔽虐德暴亡典、句試解(李学勤主編『出土文献』第九輯、中西書局、二〇一六年十月、一六七頁)に従って「茲」字に読み替えた上で、文章構造から考えて主語を「夏」と解釈する案を提示した。『尹至』第四簡にも「茲」字が出ており、その原文は「𠄎」であって「𠄎」字とは形が全く異なる。しかし、論者は「𠄎」と「茲」とが音通すること(前掲薛培武論文、二九九頁)、文章構造から考えて薛培武氏の説が最も文意が通ると考えたため、両氏に従って「茲」字に読み替える。
- (25) 原文の「𠄎」は「時」字に隸定し、「是」に読み替えられる(注(6)前掲書、六頁)。
- (26) 原文は「𠄎」。整理者は「誓」字に読み替えるが(注(15)前掲書、一三〇頁)、本稿では陳劍「說慎」(陳劍『甲骨今文考釈論集』、線装書局、二〇〇

- 七年、三十九(五十三頁)に拠り、「質」字に読み替える。
- (27) 原文は「**蔡**」。整理者は「蔡」字に隸定するが(注(15)前掲書、一二八頁)、馮勝君「清華簡《尹至》」(《中国文化遺產研究院編『出土文獻研究』第十三輯、中西書局、二〇一四年、三一〇―三二七頁)に基づき、「援」字に読み替える。
- (28) 原文は「**穿**」。整理者は「服」字に読み替えるが(注(15)前掲書、一三〇頁)、本稿では復旦大学出土文獻与古文字研究中心研究生読書会「清華簡《尹至》、《尹誥》研読札記(附:《尹至》、《尹誥》、《程寤》积文)」(復旦大学出土文獻与古文字研究中心HP・学者文庫、https://www.fdgwz.org.cn/Web/Show/1352#_edn17 二〇一一年一月五日発表)に従って「附」字に読み替える。
- (29) 原文は「**捷**」。整理者は「捷」字に隸定するが(注(15)前掲書、一三〇頁)、陳劍「甲骨金文“**捷**”字補釈」(注(26)前掲書、九十九―一〇六頁)に基づき、「翦」字に隸定する。
- (30) 注(15)前掲書、一二二頁。
- (31) 書き下し文と积文は、福田哲之「『尹誥』の思想的意義」(湯浅邦弘編『清華簡研究』、汲古書院、二〇一七年、一一四頁)による。
- (32) 注(31)前掲論文、一一五―一一六頁。
- (33) 注(31)前掲論文、一二二頁。
- (34) 劉国忠「清華簡《赤鳩之集湯之屋》与伊尹問夏」(清華大学出土文獻研究与保護中心編『清華簡研究』第二輯、中西書局、二〇一五年、一七五頁)、阮明套「清華簡《赤鳩之集湯之屋》所見古史伝説」(《中国史研究》二〇二二年第三期、八十四頁)。
- (35) 注(34)前掲劉国忠論文、一七三頁。
- (36) 注(34)前掲劉国忠論文、一七二―一七七頁。
- (37) 注(34)前掲阮明套論文、八十四頁。
- (38) 横山慎悟「試論・伊尹説話に見る「食医」觀念の発生」(《九州中國學會報》第五十六号、二〇一八年五月、三頁)。
- (39) 注(38)前掲論文、十頁。
- (40) 拙稿「清華簡『五紀』第二一部分の思想的特徴…病因論と疾病観の観点から」(《中国研究集刊》第六十八号、二〇二二年八月、五十七頁。のちに六車楓「清華簡『五紀』『行称』『病方』から考える古代中国の身体観・病氣観」、二〇二二年度大阪大学博士学位申請論文、二〇二三年三月、八十二頁に収録)。
- (41) 山田慶兒氏が指摘するとおり、扁鵲の透視能力は医というよりほとんど巫の持つ能力と言える(山田慶兒「医学の伝授」、『山田慶兒著作集』編集委員会『山田慶兒著作集』第五卷、臨川書店、二〇二二年、三十九頁)。そう考えると、扁鵲の存在自体が治療の担い手に医と巫とが、病因論に氣と鬼とが併存していたことを表していると捉えられよう。
- (本学衣笠総合研究機構専門研究員・日本学術振興会特別研究員PD)
- 〔附記〕本研究はJSPS科研費JP23K12088(特別研究員奨励費)の助成を受けたものである。また、本稿の論点は、『中國出土資料研究』第二十九号に拙稿「桀王の疾病記述に見る清華簡『赤鳩之集湯之屋』の疾病観」を投稿し、査読者から懇切な指導を賜った際、着想を得たものである。厚く感謝申し上げたい。